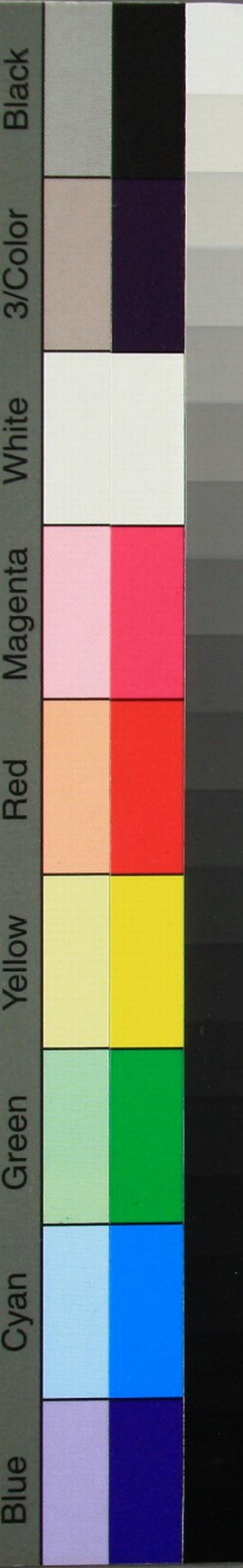
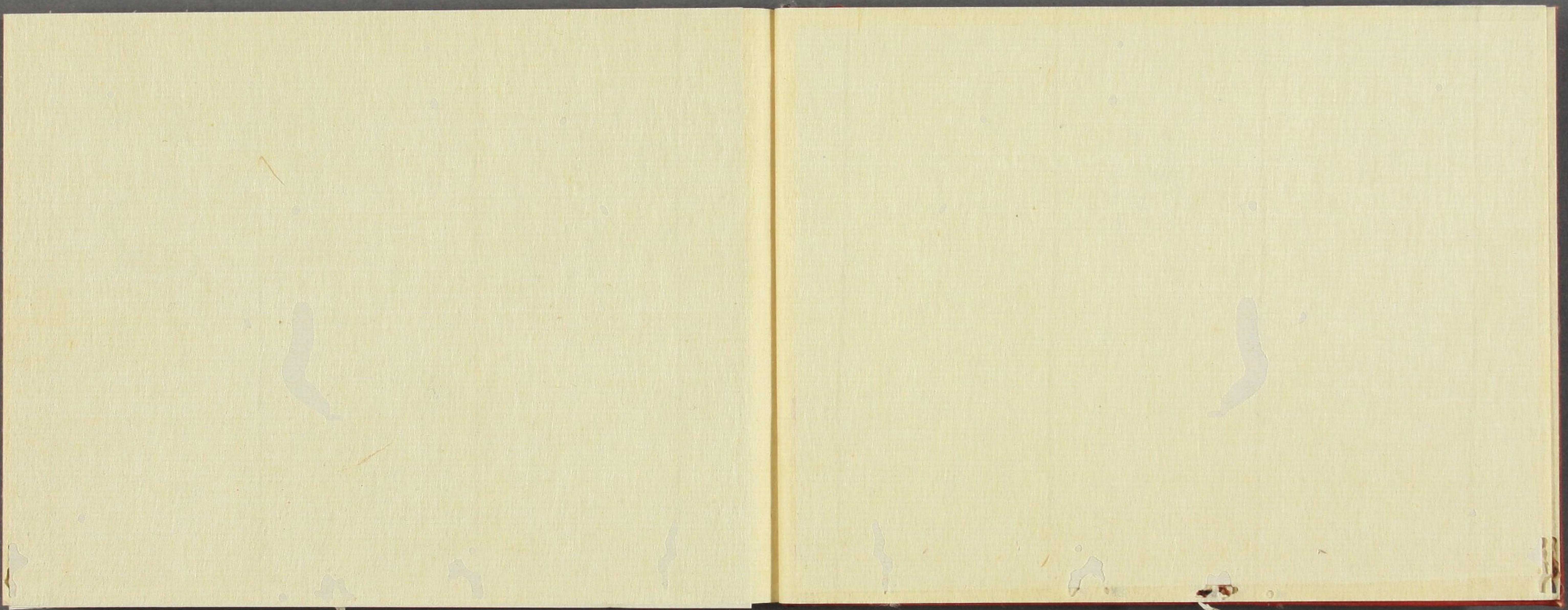


6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16



頤





檍

冰子并洞力巻名  
うねりの御子アハ模の  
花の、かはしとあーぬに  
まうち花と申す胡の  
あれよよ、さつれどあ  
源氏一歳六月より冬  
までの事と云ふも爲  
きの末同年也

齊院行くとて「の角

のこ思ひあらん

歎院行くとて丁父桃園

式部の官服也重服

もて、おりとも御事也

河海桃園之奉達筆

の事の事とおきわ准拠

例を下す

歎宮へ代

よ、また歎院へと御服へ

そりねや代筋はがすをも

是歎宮歎院のうちと  
紫巻よ宮と称スル今卷

槿歎院女立宮女三宮

桃園まよ宮齊雲女院

源氏也

少々とて舞

宮より引く、あ舞

う月はあきて桃の衣

官服よりは段よ御院

おりて、又は他所よゆて

は桃園宮よりつゝ津を  
乃とくわ桃園宮の今  
仏心の其法

大私内納之桃園兵部官  
を以てはうづ月晦  
かゆよどくの宮方  
宮方よもておつりす  
たるの秋のにてて御す  
ひはいとく君くとしに  
拾遺集よ桃園よ住む

きよみの屏風よ肅之  
白妙のすす名すほア花  
色印もつされよとねほ  
桃園在舞一糸小太官西  
一糸西中舞世子も南壽  
拘杞可然而此、納言安  
保光中納言代<sub>男</sub>魏王  
傳領号桃園中納言  
と接敷<sub>音</sub>固毅王事次  
处喜帝御連校并九月

薨逝事すホ相似タリ

少北云延祐七年宵八日  
歿院<sup>鑾女</sup>内<sup>皇后</sup>主自相  
中所病困篤及曉出院至  
太寧<sup>師毅王</sup>和國家  
九案右丞相龍天德三年  
二月十三日柩國家之寢  
殿立坊城家此家有寢寢  
殿去冬立小封亭之對  
卑陋尤甚乃所改作也

女玄<sup>院</sup>御子<sup>モモ</sup>也<sup>シ</sup>  
式ア<sup>ニ</sup>宮<sup>ニ</sup>速枝<sup>源氏</sup>  
の内<sup>モ</sup>お<sup>モ</sup>セ

モモの内<sup>モ</sup>お<sup>モ</sup>シ<sup>シ</sup>  
女玄<sup>院</sup>の内<sup>モ</sup>お<sup>モ</sup>シ<sup>シ</sup>  
所<sup>モ</sup>すて<sup>モ</sup>お<sup>モ</sup>シ<sup>シ</sup>  
レモモ<sup>モ</sup>モ<sup>モ</sup>く<sup>モ</sup>女玄<sup>院</sup>  
かと<sup>モ</sup>木<sup>モ</sup>は桐<sup>モ</sup>臺<sup>モ</sup>常<sup>モ</sup>お<sup>モ</sup>  
よも<sup>モ</sup>そ<sup>モ</sup>の<sup>モ</sup>御<sup>モ</sup>ひ<sup>モ</sup>も<sup>モ</sup>す

ノノノノ

お前ちゃんは見やしん

ア西の花束の女立宮住

ほほえ

御もあくあまよし。アリ  
おもと家薨おもと一母御  
（まよあきてうさぬあもし）  
たかはしまにじくとあがめ  
ゆきも宿ゆきもすすまわ  
ばる

宮もあくへめて 女立宮也

このよしおもよしと 女立宮  
桜改さくめい太政大臣室奉上

女立宮の姉也

もとあれ そしよ似そしよも

ゆき ゆき ゆき ゆき

チトリトキも通スルノ舞膏

のを

ひよふ おふよひよひよ  
おひよおひよおひよ

私先に新政の事で  
あはれやふもとされ  
し金は女立家へもと  
小ちかくしてのこま  
ねまほそめいじるが  
どうも

私がうそとがゆく  
て意あくつてふるが  
きもとどくわぐも  
文森家をとほす

まよもとおもむり  
ゆうゆうとそれと  
ほつとしま  
院のうぐれゆすら  
女立家の御  
み宮はく他國或々寔  
かくもゆうが  
源氏のゆすりよと/or  
ひさ年ばかりちまと  
思ふ也

あぬせよ下よし

とすひ藝居のまえ

ゑりくわむすよ

ゆまうていはよほ

まもま

よこのひわうるを下く

まちのうかとゆはま

謝ひや

ともく女立宮の御色

ほらみせ之相を帝廟

け原は汝磨瀬原のまえ  
あるのを知れおまきで  
又そくゆはうとくと筆  
すまを

うそせよ り沉淪の

時も前よりうとうと  
さうよや只してよし  
原のまえとあんしき  
重い余よきじもしあ  
よ

まくとおはなはる  
よかげしし源氏  
すらむらしき風流  
のぬらへるのよ

叶(ア)

山(ア)やうて 源氏道  
をかうゆめに也  
地のゆららく 淀泉邊  
あ(ア)らゆくも

アラタニヒルハシマリ

アラタニヒルハシマリ

アラタニヒルハシマリ  
女(ア)意  
切(ア)源氏とゆふにき  
ひくみがひふにひく  
のひくみ

アラタニヒルハシマリ

アラタニヒルハシマリ  
おれをゆふに おアム  
宮や源氏と舞(アラタニヒルハシマリ)

アラタニヒルハシマリ

さもさすい さもあつて  
うれしきや  
まわらまきせ 原氏  
あれとくわて引  
ひや  
あきのわく おれの之  
えぬくゆそ しのめ  
徳よ徳されうる事  
丁づりぬや  
とおも縁どりて

主義  
かじきのふと 服考  
所のふと縁がよ  
かじきの布と用ひて  
几帳とい木下のよ黒  
あてふとひらふ  
帷ふとひらふ  
よどぎ とよとひらふ  
よどぎ、とよとひらふ  
よどぎ、とよとひらふ

女房官也

無事は成らば時の宣旨を

清めし今、一の

中宮御院引と西門  
の公用も見てかみます  
人やがと作ります  
あるは、あれあせます  
いじに、アハシホトと書  
後者や御名とあります所  
宣旨りとて御書もあり

ござりてこの御人間は  
まさに大船の船を參  
こゝで御よねどりて  
ゆきそとーてとあり  
してゆきよ

あまよとくやと年  
御官位がよととお  
かくの御つ

神さしよる、源氏のと  
ゆ事い年うります

五  
及  
之  
事  
神  
之  
氣  
也  
神  
雨

神宿

内侍も内々也  
あきせひれまかく  
ももや文宮のやまと  
父宮も御子て御内侍も  
おりあくびひれ宮もあ  
意として重はゆて

れり  
それ又思ひて  
そとの中うとやそ  
あア世へ源氏の方  
いしらぬとま  
マとお月見之  
るが、年月の方  
おもひてあまれと  
あゆむけんとせ  
まふそぞけめき

源氏の事と承下に事  
不宣する事也

人をもとめの事也

無常かて年月を重んじ  
御事も常のかくもしら  
はあきやうわむと事  
ゆきといひゆきと事  
乃よ源氏の事也と事  
あきせりふと事也  
あもひと事也

いづれの じいづれき  
酒さけがまかせと事也と  
えちと事也と事也と  
きてをよそへつと  
もすれうしあともく  
思ひあくと事也と事  
はいふと事也と事也  
もすれに事也と事也

とくすまへんじよ  
ままうくさきまども  
きそくひとねとね  
おうねに似あひて  
よしのうきとくよめ  
と内た居されや  
きでやみあらわす  
せ中れあるはゆどぞ  
きちりかひつねに  
いざなふるよ堅固よ

ひじらひやとくれ  
とまどものあう  
私けりをめりあもし  
とまつまとつあ實  
あつた辞のあれも  
ちつがへまやのゑ  
きひもとせりと  
りとくよ

ほそくの内に大海の内  
東南の内と北がとの内  
といはるの不祥の事  
そのははとてとてとて  
の事とてとての事には  
事ももじもじもじも  
人をもと和へじく 漢氏國  
をもととてとてとてとて  
人をもととてとてとてと  
金をもととてとてとて

昌也 いの浦氏をも  
御もととてとてとてとて  
あはははははははは  
もととてとてとてとて  
あはははははははは  
てててててててて  
やまちととてとてとて  
御はははははははは  
ととととととととと  
えももももももももも

也すとあやかしむと  
ちのまきはやもとを  
ゆめやしてもがれ  
ゆめうのむを  
はやれとおほせばら  
こを用く  
もるく事は あゆみ  
やよかのとす  
檜の林辟やくら  
まのまゆふまわ

がくくにあくと  
私そとやくす  
源氏の消息とくつよ  
人の事もくとくみま  
とくへりゆきんと  
源氏の原とくわき  
ゆもすりやくは使の人  
の枝折とくはいひ  
もや檜のぬゑの様  
跡とくわ

よしめりあつめり ももれ

今いき辭

そそよつちあゆりほす  
ぬべのうきよりあ

史

まくわやに 源氏の  
望みの思ひ不とぞ  
一とぞもせむ

よしのじよ

源氏のうじの経

まくはそい面ほくち  
よや年の近くまよひ面  
ほくぢてやしお様  
じよはあつらひを  
西行うくつも

よしめりあつめり  
住吉や経

君の門へまきの聲よ  
よしめりあつめり  
まとふとまく

事あるぬやほこをよひ  
アテレシタニヤウテヨ  
トヤミルヤモタマシタ  
タタカアリヒヤウ

所ぞもまわ

ほづみ

太うのねえ糾九月せきを  
きおりめくあれ ますて  
秋院あきいんておもへゆ  
阿多キ也昔よ小源氏のる

ナカヤシモヒナサビ  
毎夜の女房とて思ひ  
せぢううへ

あめくそ 連はせめし  
まふあいももぐれなす  
志津源氏にかたむ  
とくみくすとよもと  
よどとよつじよと

翌朝也

まわるやうに 人の道

よもぐく簾外あても  
まわるよんからくふる  
しかばとくらはる  
人と面同ともくわ  
きを  
されといはへ候りあそと  
候てはまれと我を  
もとねどや  
うおまめをあわせ

胡の木もさへす  
てといひ出るまやうを  
うやうのあさくねと  
さや下の木に檜の枝  
はやい往きもわきとあ  
れと見ひゆてまくや  
いあいとまことまく  
私めだの年りくくま  
うま事とまくとまく  
物のけあともく

きのまでは成るべからず

と

さうものにはゆき

本門であるが如きの

御心をもあらむ事

一とよ

うはやうともあらむにち

いふことつづくの

ことづく

おもひてよと覺ゆ

まのゆよそよす  
故よひてよそゆ  
わづくよしんと事  
もくわづくよかどり  
秋よへきかむせに  
ほのゆのゆの行しまで  
きてよひてよそゆ  
やわらのうるいにままで  
おもひてよそゆ

これうちうきをなさず  
事の間と源氏の  
よみぬようちもしきそ  
ら比魯方の難よあ  
あまつにうらひゆ期か  
の爲と切もやひ通  
私あうきにう期か  
自身の歎は懐のめう  
うきゆううきゆ  
うきゆううきゆ

月夜の風  
あまねく源氏の心のうす  
いとまかしゆとありハ秋  
月夜のけむりとまくらふ  
うの明月の身には  
よもやまに(ゆえぬ)と  
ててはよとひあまくの  
あまくわ  
ほのか  
ゆるぎ

まよしの 駒 十ヨニカ

人の心と おもひ

おもひいつまむこと。づく  
一はねじますよ<sup>方曲</sup>ゆむ

とあめい<sup>タマ</sup>い。うつ<sup>タマ</sup>よ

ほき<sup>タマ</sup>は おめくらを

ひとと肩<sup>タマ</sup>をまわ

けくまかとぞのわ

かくまくとくま

まくまくとくま

まくまくとくま

せんせんほゆし方

せんせんほゆし方

せんせんほゆし方

せんせんほゆし方

ももうてほゆし方

似あらふ本とおもひ

かくまくとくま

まくまくとくま

とくに神とてゐるやう

ひづり あふむかへ主

うててや

おんのひ 連氏の住

ひよしや

ほのめく 每日の女房

ともせ

けもあぬとよすよ

ゆてあくさきを

あらももとうべく

こくよむとよかん

ほよみゆふよや

宮のひのひだるみは

ひづりやひづりひづり

ゑね思ひうきさ連

宮むかよひじふくら

ぬといよく思ひうき

やねいしきくわといよや

の事思ひしきくわといよや

あらももとうべく

えまめりあがむよ け流  
うみぬよがむのひ取事  
あらじつへ人のそらふ  
さんとをもあらゆ  
世中よもやかれて  
様官と源氏の事とせら  
みじあらじてよかあら  
ひとけはすゑ  
たうじんも  
紫といせらひだきと

因ひてもうきのまわ  
葉とよがくひつじ  
見しゆせ  
うらつまよめかわせ  
ゆよ 源氏のあつた  
ひとけはすゑ  
ゆくくおぎす  
まくく源氏の取事  
とあらひのやこいゆ  
のひくよとやく

お前どもよ

せよもまう宮裏を  
權の姫君も宮のまうる

よ

お前どもひづりよやむこ  
とく も前をじて 権の  
姫君のそぞれむか見え  
ひきわあれよ  
権の姫君とひづりよや  
浦女のもれしも前をよ

浦女がれ 狂め女を  
はあきとすともかくと葉  
上のひづりよ

さうひづりのひづりよ

しまといはよよよのぬ

ひづりよ

御院よ禁よのひづり

もんとすみよ

あひづりよ

紫上にゆく  
御所の事  
あがつる

蒙古文  
蒙古語  
蒙古族  
蒙古人民  
蒙古人民民主  
蒙古人民民主共和國

卷之三

アハタニガタニ

おのづか  
のよし  
庵

其上に  
其上に  
其上に

のうせん

九月  
九月  
九月  
九月  
九月  
九月  
九月  
九月  
九月

金匱要略

土  
月  
之  
神  
之  
傳

廢也

あくまでも涼は  
秋別は罪ぬ

卷之三

まことにあはれの事ぢや  
うやうのうへうわゆるや  
あはれをうちうひよ  
かようとくとくとくとく

مَنْ يَرْجُوا لِحَافَةَ الْمَوْتِ

おもひをせんじゆくの  
とちやくはなづかむる  
源氏のうちやまゆのふ  
とくして用ひてゆる

う

宮よ坐みてうこ 女宮  
栗内と肩あらねよ出  
ひゆ

うごくよめよ 葉よのと  
ひきひきとすも源氏の

よもぎや

ゆふくにまき刀さかひくと  
げほよれぬてひよや  
うやわみの源氏の通  
えりや宮がくわくとく首を  
くほほとくとくを  
意教とくとくを出で  
そあほすゆくとくのと  
きよおとくの桃園宮の  
竹の籠

人言もあらず

きくものやうり ほの言

そそくちよあらばよせ

みかともと 閻<sub>吉昌</sub>守<sub>國</sub>智<sub>裕</sub>

義加安毛利

うそどかうて

ももぬき、神也傍了

うじづぬかとひれ

ごがくといそと上の

こわは鑑のうをよ

うそどかうて

上<sub>アシ</sub>鏡<sub>ヤク</sub>や 行<sub>アハラ</sub>馬<sub>マ</sub>蹄<sub>テイ</sub>

生<sub>アシ</sub>易<sub>ヤク</sub>蹴<sub>カタ</sub>用<sub>ル</sub>稀<sub>ヒ</sub>印<sub>ムニ</sub>鎖<sub>カミ</sub>

法難<sub>ハツナ</sub>用<sub>ム</sub> 白氏<sub>シロシ</sub>文集<sub>モンジ</sub>

みそぞのあすくも

ア毛<sub>アモ</sub>鴟<sub>コト</sub>三月不見况於三

年或曰自阪磨歸洛

四年秋

叔<sub>シズ</sub>源氏七年正月賦

竹<sub>チク</sub>の<sub>ノ</sub>うして<sub>シテ</sub>舞<sub>フ</sub>

よあせ年のあすくも

感のよしとせと歎せ  
むこそをう用ひあて  
う事とつゝあらむ  
かくはなせぬも  
りといふ  
からせとんほく　因の入  
よがくせとみほく　出の  
そとのやどりと見ゆく  
とてとくわままで  
孰とぞひくや

うのよしとせと歎せ  
春す　お葉　もみ  
しあす　とす  
よせら　歌　のす  
世の　とす  
いづ　ひ　りきうを  
ひくと　おとを　お  
徳　源氏の　とす  
ぬ　解　や

五　仲興

いきとく 叩鳥文

がこまれと おもひのゆ

まねてや

世はあすみのとも 三才

まわんとまくらせり

あまのともさう称ゆ

称いありゆゑを

たのうへ 鳥院や

こむ宮のひへ 后院を

出家のはハ男女をそしよ

家ノ金と皆才子と稱

しき也

その世のことは 源氏の邊

院のすのまもノ今れ

若よううりと思ふも

心やうもよゆにめり

もみゆまくはまくわ

まや

もみゆまく

もみゆまくはまくわ

まし経人あひな等  
我身へと身をかわせ  
のぬをあそばせりつよ  
宿てもあれよまく  
ひよとのゆゑ  
もすこよちる 老翁の古  
事うロうちゆことぢや  
傳こころびて写る  
御もみゆゆせ

源典侍題

まとうじひ詠よと文  
人のうきもすくまが  
源典侍、ひつ着筆と  
シテ、我身のうふ  
うどんじ老のうする  
御みみかとせんじ  
いとあらわむおやた  
いとえまくめお老方  
やに源典侍、西本も  
みほつよよと

院の落成の御慶祝と  
の事は思ひ出でる  
もうまじ世はほんと  
あるじよむけ零落

一かくまや  
あるじよむけ零落

入の宮がゆ軍をも  
正にまつて  
とのれもれゆうとくを  
さよ そは経といふて  
きのりまさくうみよ

きてすよやくかくと  
しのも本よりてある  
不定うせよややうて  
死うてある人のま  
ゆゑ

いとまくらすよやくと  
源氏の中のそしめと  
とあれど只しげと  
源典侍ハ村井とすと  
者のひまなうじ

アカハラと云ひ草う

とくにかくの事  
男乃はおとづれ  
卫門はおとづれ  
喜多はおとづれ  
おひでにはむらさき  
おひでにはむらさき  
この世もあはうておとづれ  
さうておとづれ

トモヤおうちのをほ  
おまと月夜に、中興  
侍のまわくよすてし  
あそと月刊してと  
よまきはまとの月  
夜すすんでしるやよ  
ねあそは十種の冷やと  
ひそ

こもいは、源氏のまよう  
と

ひそとゆうまよ  
そもよひぬくとよめ  
金てかでりうもふ  
ひそとく、檜のま  
こ宮がよ、又或アマ室  
原ゆふとあやせ  
ほもよ、ゆわよ、  
けもうて、あよ

とそもそしよもとあみ  
ひそ

つまきはせしに

ひりかほきよそな  
ひきの代は人のほきよ  
きてつしまく

ひつこのとひすあまくあ

きどり叶ふを

喜翁

おもむかすてうの  
をうてじよやおれりて  
あまとふくわうす

あそそぢふくし  
人のよみがゑひ草じと  
みえるいはるへむく  
秋葉よがつて、竹の風心  
とあそぼていさんと  
ちむらひかととあつう  
花を折、重ねむかづく  
わらわら

ひりよみのては 草よ  
かくすかくすかくすかくす

さくゆ

いとがよみかず

望

川

アタマヒラの山ある名取川  
ハセカニテボクシテス  
カツカツシテアキナガル  
シテモテモテモカサス  
カツカツシテモカサス  
カツカツシテモカサス  
カツカツシテモカサス

すくよま

うらやまし 宣るがま  
さきうしひとんりの  
人のちゆうあんとおこ  
せもあなかくま  
まゆゆくのひほく  
かくよくわら  
ゆのひのひもももこ

ゆ

まかの御 人のよひ  
さかねて權をもつて  
中也

とあてのあひの  
おほきつゝとひく  
とあての世の人のけ  
とくとくのほゆ  
とくとくのせのく  
とくとくのくわ  
とくとくのくわ  
とくとくのくわ

每流主い詔をうちと  
ゆめこすしのすもがく  
まのくらよ后よかと  
おゆくや

かくかくふ 人のよひ  
さかんとおりるをくわ  
ゆくかくのまじきも  
毎流のふ見キアラヤ  
とも系圖よいえらば  
とくとくのほゆ

ひづれと 爰だの女房とも  
氣味よがよとありて  
おとこあつらりといひく  
ほやかめゆふ

まふにんのあつらふ  
種母だのあつらふと  
浦氏のあつらふと下  
をのへのあつら浦氏の  
のをむきてまれて川  
のね下さやかふ

あすこすゆりて あま  
御守りて まよの浦  
さうりいし浦氏の事  
よき世の人の心を磨  
いてほれすれあれ  
はるかとく勘弁一  
わよまよゆふせ  
みあざま あざる氣化  
じあづん 甚るうそを  
とくづくべし

女  
子  
之  
聲

あはれの如きをあらゆる

蒙古文

の  
の  
の

宝くわんのし 源氏の絵

卷之三

アラミテ  
源氏物語

かくかく  
かくかく

はるかに進む  
空の邊

新編  
卷之三

まことに  
五十九日は

まめぬよあるもれ  
あるはれもあきらもれ  
一ときよあきらもれ  
かくえあきらもれ  
まほ葉よつるまが  
はとや  
のせのせかはりて  
ねと竹よすてわせ  
のせのせちづくめのせ  
さよのせせれね竹  
さよのせせれね竹  
さよのせせれね竹  
さよのせせれね竹  
さよのせせれね竹  
さよのせせれね竹

吉のす日とす月と  
比西白評判

もをゆきめり

情が納まれぬす

よその月よ女のまこと

あやせ組萬流布の

年み網引と

監目化よとまとむ月の

片くとあらはる

まほ今てあがす萬

まほ今てあがす萬

ちの月よもあられと  
いふまわ

まほうとよもよと是よ  
育つからうあるわづち  
うそりとあらまわ

迷妄寺鐘歌枕能

高姫春雪撥簾者

ちゆか

應和二年四十二月廿

今原忠允鳥部常嗣

堆雪作蓬萊山於華房  
小庭今日功了賜常則  
及畫所雜色役若元  
祿有善

右肩あつよ まほの背も  
やうるやうりへあそぶの  
ふは汗秋と墨しらすは  
おひきとげうも、苦い<sup>ハ</sup>禱  
の腰うつべ

やふまと おひまとてや  
四つとくまや  
あらかま。女房も  
うち扇と用ひましむ内  
とかくさんてぢや  
だ。ほ。ま。れ。貪  
らうひままでたせよ  
一を中宮のおふく  
ば中宮のあわせに

かのうちのち山の若とわ  
まあともしきうども  
又死山の後涼風のあ  
もの臺よち山をほ  
きて作みあつて一木  
小石紀すとまくわり寛和  
元年五月十日坐也  
おまよとまひの十室  
の往來いづれぬりと  
お復すア屋敷院アリ

われ志とねば  
わがとよす雪の山  
わがめ所とまれば  
の臺にとけくわらア  
中宮山と弘徽殿のあ  
はくとてア京極殿  
つとせぬとて  
あまためりもちる山  
ともくよちよまが  
けち山長西二年のあ

はわ語實ひのまうれ  
うせといふ事あらん又ちよ  
ういが人所毛當ばさきて  
山とほく草木の多ひあ

してとみゆ

秋水にの比伏見アヤハシキ

あやめとぞむらり

あかねおり 廉ひら

とよめ

ひやうじのひる

ゆめとくらうわらうや  
お月あきらめ  
そそくとくらうめとくら  
一月のあくまく一月  
とくらうわく かくわ  
もむやくすまくとくら  
すくよつめとくら  
あるこ

君とて葉とても根  
まをゆる

もくじよしりやゑと  
かくさのまことかく  
一のゆゑ

神をうしむかの庄  
いせほねぢゆとせ  
神をうきてゆひすく  
あらまわすうち  
やあきゆきぬ  
ゆるのこそてん勝月船  
のまや紫上の船

あさみれむらかと  
あら月夜あらまく小  
うへきよがわふ  
きよひと源  
たるのむかみあ  
くわくわくわくわく

ねあらまくらすかと  
まくわくわくわくわく  
くわくわくわくわく  
くわくわくわくわく

はくのまくら  
内流すとよしむか  
もくもく  
もくもく  
我そはねありあすて  
ぬるうじゆるうある  
角也  
あくまく  
人今がいとむか  
あくまく  
あくまく

地下や深めのまくわ  
こなと重くはね  
あきよて人の居る  
山里今がいとむか  
あくまく  
愛顧のかれをうのみ  
恰好よいとむか  
今がいとむか、愛顧の  
じよひ思あへてひが  
ちよひ思あへてひが



紫の草を西山と

いきわらゆ

槿宮がくくもひめのさう  
うけつしよ

かくはくじやくも

みくにそへせああすて

ちとよひちのねもも

よひあらむ一役ちたよ

ちとよひとく絆せき

のうねに鷺のせう

葉とみ豆の年月  
宮のひすいは花をせん連  
りあひのう

葉のうせのす

女君のひすいは葉の  
とこさんわや

いといくへやうも

ゆのあうや

うちとうろてゆ

まきねのねめく

あて候ぬい寒夜の静也  
夢もじとくまそやうて  
えをちとこくへゆよ  
かくまんすわまと里よ  
つあくひづるや  
ひと居か。故宮の爲  
よぬ御殿とさむら也  
かくひづるよ  
ほどの年よし分別  
あき

みかみりよ 人のとくせ  
お月也  
うちにもひよどり  
またいとお月さんよ  
お前ともちよどり  
一ト池中花盡滿 花  
想是往生人 各單座  
葉花葉待我向浮因  
行人立と讀 一蓮託生  
とゆふすとくとく

水の浦に生(よ)うてゐる

いわてたる山の

生(よ)がりて

とあるとて

まよひてまよひて

とあるとて

とあるとて

